書評

『日蓮宗信行論の研究』

昨年、立正大学の渡辺宝陽教授は、長い日蓮宗教学史研究の成果を一書にまとめ、『日蓮宗信行論の研究』と題して世に問うた。著者はその序の中でこの書のテーマを、「日蓮宗教学史の展開について、信行論及びその周辺をめぐる観点から検討したものである」と述べている。この日蓮宗教学史という学問分野は近代に至って開拓され、著者の恩師である故望月歓厚・故執行海秀両教授によって確立された宗教教理史のジャンルに入れられるものである。望月歓厚師には『日蓮宗学説史』という労作があり、日蓮宗の各宗学者の思想を、本迹論・顕本論・本仏論・本尊論・題目論・修行論・成仏論という項目のもとに史的に論じて、日蓮宗教学の研究に偉大な足跡を残した。

著者はこの望月・執行両師の業績を引き継ぎつつも、この書で新たな教学史の構成を意図してのぞんだことが窺われる。それは「信行論」という観点を選んだことによく表われていると思う。先の『学説史』の教条的な項目では見落としがちな、先師の内面の信仰的軌跡ともいうべき思想的営みに光をあてようとしたのではないだろうか。ただし、それが成功したかどうかは異論もあろう。「信行論」という概念規定が十分でなかったことも一因にあるのだろうが、むしろ著者が「信行論」という観点を固定させずに、それぞれに応じて、「信行論」を形成すると考えた「謗法」「如説修行」「三大秘法」「五種行」「事観」というような思想軸によって先師の思想を解明せんと心がけたため、確かに個々の教学には生き生きと浮き彫りにされた面もあるにはあるが、全体としての読了感は、ではいったい「日蓮宗信行論」とは何だろうか、というあいまいさが残るのである。これはこの書が「信行論」という形で体系的な教学史をめざしたのではなく、著者もいうように、信行論研究の基礎作業として、その方向性をうちだしたものとして考えるべきなのであろう。でなければ日蓮宗の「信」と「行」を問題にしながら、草山元政の流れに一章を設けない理由が不可解となる。それはともかくとして、本文の随処に著者の日蓮宗学の内実へのアプローチが試みられ、その主体者の信仰を問いかける姿勢は、これからの日蓮教学の研究に大きな影響を与えるであろうことは間違いないと思われる。

では本書の構成とその内容について二・三私見を述べてみたい。本書は、第一章日蓮聖人の信行論、第二章日蓮宗における法華経講述書の研究、第三章中世日蓮教学における信行論の展開、第四章近世日蓮教学における信行論の展

開、第五章優陀那日輝の観心教学、から成っており、すでに各学会誌に発表された論稿も多い。

第一章は著者が近年教学史の研究から専ら直接宗祖の思想を究明せんとしている、その成果である。この中で取り上げられている「聖人教学における謗法の意義」の項はこの書全体のキーポイントに位置づけられる示唆に富んだ論文で、著者の信仰と宗学に対する視座をかいま見ることができる。大きな問題をはらんでいるのは、第四節で論じられている「聖人の戒壇義と教団の原点」であろう。戒壇論は日蓮宗教学の最大の弱点であり、これが未完成な為に、日蓮宗は思想的限界を常に有してきた。ここに、『波木井三郎殿御返事』から「本門の教主の寺塔」という表現を指摘し、本門戒壇義の内容を充実せんとするのである。残念ながら問題提起で終わってしまっているが、是非この新しい視点からの戒壇論を展開してもらいたいものである。ただ、この文の中でどうしても納得できない箇所がある。それは三大秘法を別なものとして考え、逆縁の者には一大秘法、順縁の者には三大秘法と一大秘法を別なものとして考え、逆縁の者には一大秘法、順縁の者には三大秘法が頭わされるという解釈である（六三―六五頁）。これは明らかに宗祖の思想を誤解しているものであり、一秘即三秘、三秘即一秘の日蓮宗教学の基本を崩すものであろう。

第二章の法華経講述書の研究は、巻末に付された「日蓮宗　法華経・祖書講注書目録」と合せて、これからの研究資料としての価値は高い。

第三章と第四章がこの書の中心であり、特に近世初期における日蓮宗の思想の転換と近世教団の成立の原点に位置する一如日重に対する考察が、著者の真面目を発揮したものであろう。日重の『見聞愚案記』の詳細な研究は、近世・近代・現代と継承された日蓮宗受不施一致派の思想の原流を解明したものとして貴重で、円明日澄の『法華啓運鈔』との関連や、不受不施の仏性日奥の折伏主義との対比に興味をそそられる。第四節で脱宗者の教学を論じているが、「信行論」としてはこの代りに仏性日奥の不受不施の信・行に紙数を設ける必要があったのではないかと私考する。

第五章は優陀那日輝の観心教学として独立したものであり、主な論稿はすでに発表されていて、最近の優陀那教学研究のブームに先行し、研究の足がかりを作った労作である。以上、望月博士の学説史以来の本格的な教学書を手にした我々は、著者の学恩に深く感謝したい。

（昭和五十一年度望月学術賞受賞。平楽寺書店発行　七五〇〇円）

〈小野　文珖〉

『宗教社会学とその周辺』

本書は、久保田正文博士喜寿記念論文集として出版されたものである。

現代社会の諸問題、宗教社会学の諸問題、法華思想をめぐる諸問題と三部に分かつ本書をみても、久保田先生の論文、著作をみても、先生の活躍する学門分野の多岐に渡る事を思わしめるものである。

本論集は以下の論文を擁する。個々の論文に対して評論する事は、私の出来得る事ではない。

現代社会の諸問題

社会学における役割理論の位置……新明　正道
現在学的民族学と民族の動向……小山　栄三
少数者集団とマージナリティ（2）……佐藤　智雄
大都市の生活環境と「めいわく」・「被害」…斉藤　昌男
現代日本農村の階級構成について……田口　正己
情報化と「情報化社会」論……美ノ谷和成
産業官僚制の日本的特質をめぐって……国近　浩一
児童の権利とその保障……中田　幸子
医療保障の現状と課題……三友　雅夫

宗教社会学の諸問題

日蓮の宗教への社会科学的視座……戸頃　重基
日本における観音信仰の構造……沼　義昭
近代民衆宗教成立過程の研究……内山　堯邦
呪術と宗教における象徴の社会的基礎……望月　哲也
題目講の機能と性格……中尾　堯
現代における仏教社会福祉……森永　松信

法華思想をめぐる諸問題

天台大師の少年時代について……野村　耀昌
法華経と伝教大師……浅井　円道
法華経の要品について……兜末　正亨
法華経における久遠実成の本仏について……勝呂　信静
不受不施派の名分論……宮崎　英修
歴史的概念としての日蓮教学の本質……茂田井教亨

宗教という現象を採りあげて考えるには、さまざまの視角があり、また方法がある。しかし宗教のような現象を採り扱うのに、完全に没価値的な態度を持って臨み得るかという事には疑問がある。

『完教社会学とその周辺』は、社会学、宗教社会学、仏教学の学術論文集であると同時に、まったく新しい学問分野を世に問うものである。しかしながら、「宗教社会学とその周辺」という学問領域の全体像を本論集から把握する事は困難に思え、むしろ分野の異った論文群のように思わ

れる。

この新しい学問は、異った学問領域の狭間を埋め尽す試みであり、専門化、細分化された学問を統合、総括せんとする企てである。本論集はその為の第一歩として「宗教社会学とその周辺」の学問領域を規定するものであると同時に、社会学もしくは宗教社会学が、自からの価値判断をもって宗教という現象に向いあう事の表明である。

宗教は、そのいずれもが、よりよい生き方を探し求めて苦闘してきた祖先たちの「生」のたたかいの軌跡であり、苦闘の結晶である。

苦闘の結晶である宗教は、同時にそのたたかいの支えでもあった。

だからこそ、宗教学は、信仰という形で自己に厳しく価値判断を迫る事になり、その宗教学との迫間を埋めるためには、社会学は、自己の価値判断、展望をもって対峙せざるを得ない事になる。

現象を分析する事に優れた社会学が、自己の価値判断にもとづいた展望をかかげる時、この新しい学問は、飛躍的に進歩する事になろう。

この論集のために論文を執筆された諸先生方は、個々の論文がいかなる関係において「宗教社会学とその周辺」という全体像を構築するか、を示す学問的責任があるのではないか。その為には、同じ材料を個々の視点でとらえた論文がまたれる。

久保田先生は、御自分の活躍する様々な学問領域が統合され、「久保田学」とでも呼ぶべき一つの新しい学問分野にまで昇華される事に大きな満足を得られると考える。

（久保田正文博士喜寿記念論文集・日新出版・昭和五十年九月三十日発行・非売品）

〈山口　寿謙〉

『戦時下の仏教』

よく知っているつもりで、案外盲点になっているのが、戦時下の仏教教団の動向である。今日から考えると狂気のような思想統制の中で、仏教々団がどのような言いがかりをつけられて弾圧されたか、あるいは、どのように素朴に「国策」に迎合していったか、一度じっくりと知っておく必要があろう。その必要をみたしてくれるのが本書である。

本書は「講座・日本近代と仏教」シリーズの一冊で、編者は日蓮宗現代宗教研究所長・中濃教篤師であるが、執筆者十一名中、五名が本宗僧侶で、中濃師の他、松村寿顕宗務総長、近江幸正現宗研顧問、石川康明同研究主任、伊藤立教同研究員と現宗研の研究成果が発揮されている好著である。なお現宗研嘱託　三田村竜全師の報告と富高行保・日本山妙法寺山務総長を加え、日蓮系の宗派の戦時中の実態が詳しく触れられているので、資料としても論説としても本宗々徒にとって価値は大きい。

もとより他宗の五師の論文も貴重であるが、紙面の都合で割愛して、本宗系の六師の八論文に紹介をしぼろう。

松村総長と富高師はそれぞれ日蓮宗の満州開教と日本山の中国布教の体験を、淡々と語っている。ともに六老僧の一人日持上人の行蹟を慕っての布教であるが、軍と特務機関の支配する占領地や植民地のこととて、在留日本人への布教が主で（各宗とも）、わずかに日本山が現地人の中にとけこめた模様である。

朝鮮・満州・中国への伝道が、武力をかざす征服者の宣撫工作にならざるを得なかった事情を中濃師が概観している。

日蓮門下にとっての弾圧であったご遺文削除改訂問題と大曼荼羅天照大神勧請の不敬問題のいきさつを、石川師が克明に解説している。今の若い人たちには信じられないようなことであろう。

弾圧と対照的に、時局に迎合して天皇本尊論を唱える皇道仏教行道会の教義歪（わい）曲の事実を中濃師が追求している。

その源流ともいうべき、国家主義思想としての日蓮主義について近江師が田中智学・本多日生・井上日召・北一輝・石原莞爾等の系譜をたどり、日蓮主義がファシズム思想に結びつく危険を警告している。

伊藤師は各宗の草の根的僧侶個人が、時局を批判し受難した具体的例証を集めて面白い。

現在、ファシズム復興の危険もあり、核戦争の危機も去らぬとき過去戦時中の仏教の姿を論説した本書のもつ意味は大きい。それは過去の記録であるのみでなく、将来に対する警鐘である。平和のために、信教の自由を守るために

どのように努力するか、どのように誤ってはならないかの指針となろう。ぜひ一読をおすすめしたい。

（A5版三三八頁・二千八百円　発行所・国書刊行会

〒170　豊島区巣鴨三〜五〜一八）

〈新間　智照〉